

2007-IV-15

# 政治変動下の発展途上国の政党

——地域横断的研究——

調査研究報告書

佐藤 章 編

2008年3月

独立行政法人 日本貿易振興機構

アジア経済研究所

調査研究報告書

地域研究センター 2007-Ⅳ-15  
「政治変動下の発展途上国の政党」研究会

# 政治変動下の発展途上国の政党

——地域横断的研究——

調査研究報告書

佐藤 章 編

2008年3月

独立行政法人 日本貿易振興機構

アジア経済研究所



## まえがき

アジア経済研究所では、「政治変動下の発展途上国の政党：地域横断的研究」と題する共同研究会を、2007年度から2年間の予定で実施している。本研究会は、発展途上国における政党ないし政党システムの様態を、地域横断的な比較の枠組みの中で探るものであり、ラテンアメリカ、中東、アフリカと専門地域を異にする研究者によって組織されている。

初年度にあたる2007年度は、このメンバーで研究会を組織するのが初めてということと、地域を超えて議論を成立させるのが難度の高い課題でもあることから、全員で事例を持ち寄って自由に議論するという方針にもとに進められた。計8回の研究会を持ち、主査による基調報告、主査含む7人の委員全員による事例報告、それらをめぐる討論を行った。また、2名の委員は現地調査（ケニア、ならびにレバノン、シリア、イラン）を実施し、現地の最新情報を収集した。

本報告書は、この初年度の活動を踏まえて書かれた中間報告である。中間報告ということもあり、原稿の性格にはとくに主査の方から制約を付していない。研究ノートの性格のもの、資料的性格のもの、両者の性格を兼ね備えたものとバラエティがあるが、各委員がそれぞれの研究計画に沿って必要不可欠な作業を選択した結果である。

来たる2008年度は、この作業を踏まえ、各自が最終成果をまとめていくこととなる。順調であった初年度の流れを受け、引き続き研究に励むこととなる。最終成果は2008年度中に執筆され、2009年度中に研究論文集として刊行される予定である。

初年度の研究会では、オブザーバーの方々にも鋭いコメントで研究会を盛り上げて頂いた。武内進一、中村正志、川村晃一、牧野久美子、相沢伸広（以上、アジア経済研究所）の各氏には、記して感謝申し上げたい。

2008年3月

佐藤章

## 目次

まえがき	3
目次	4
執筆者紹介	7
序章 発展途上諸国における政党・政党システムの比較研究に向けて	
佐藤 章	
はじめに	9
第1節 研究の背景、意義、狙い	10
第2節 本研究会での「発展途上国」概念について	12
第3節 初年度の議論	14
むすび	16
第1章 レバノンの政治制度、政治体制、政治構造	
——第二共和制を中心に	
青山 弘之	
はじめに	19
第1節 宗派主義制度に基づく多極共存型民主主義体制	21
第2節 権力の二元的構造	29
第3節 アンビバレントな政党	34
おわりにかえて	46
付録	52
第2章 戦後イラクにおける政党政治と民族・宗派のポリティクス	
山尾 大	
はじめに	63
第1節 戦後イラクの政治体制と政党	66
第2節 顕在化する民族・宗派のポリティクス	76
第3節 インフォーマルな政治動員と政治的不安定	86
おわりに	98
図表	105

第3章 南米南部諸国におけるネオリベラル期民主主義の  
政党システムを分析するための予備的考察

出岡 直也

はじめに	119
第1節 本稿の問題設定	120
第2節 ネオリベラル改革から左傾化の時代の南米南部の政党 システムの概観	125
第3節 労働者階級編入によって形成された政党システム	133
第4節 1960年代（キューバ革命後の時代）以降の変容	136
第5節 民主主義が維持される時代になって以降の変容の分析	142
第6節 結論に代えて ——ネオリベラル時代の階級妥協の政党システム？	156
表	173

第4章 政党政治を乗り越える？

——ラテンアメリカにおける「社会運動」の政治的潜在力とその限界

上谷 直克

はじめに	175
第1節 政治的活動空間の開放	177
第2節 政治運動体の実際	184
第3節 (ネオ)ポピュリストとの関係性	191
おわりに (展望)	198
図表	203

第5章 政党の終焉

——南アフリカ「国民党／新国民党」解散の政治学

遠藤 貢

第1節 問題設定と先行研究	207
第2節 新生南アフリカの政治制度におけるいくつかの特徴	210
第3節 1994年選挙と1999年選挙と国民党／新国民党の対応	213
第4節 制度変化への対応の政治：2000年以降	217
まとめと課題	222
図表	226

## 第6章 ケニアの政治変動と政党研究のために（資料）

津田 みわ

解題		233
資料		239
表 1	政党名などの略語	239
図	ケニア歴代国会における党勢の変遷（1963～2008年）	244
表 2	第1次国会（1963～69年）党別議席数	245
表 3	第2～6次国会（1969～91年）党別議席数	246
表 4	第7～10次国会（1992～2008年）党別議席数	247
表 5	歴代キバキ政権の閣僚構成（2006年11月15日～2008年1月8日）	248
表 6	ケニア第9次国会：全国会議員リスト（2002年12月～2007年11月）および所属政党の変遷	263
表 7	ケニア第10次国会議員（2007年12月～）：所属政党の変遷	271

## 第7章 内戦期コートディヴォワール政治史年表（資料）

佐藤 章

解題		277
資料		285
	内戦期コートディヴォワール政治史年表	285
付表 1	年表中に登場する主な英字略号	325
付表 2	コートディヴォワール内戦における合意文書	328
付表 3	コートディヴォワール内戦に直接関連する国連安保理決議一覧	330
付属資料	ワガドゥグ政治合意 全訳	332

## 執筆者紹介

佐藤 章 (さとう・あきら) 序章 第7章担当  
研究会主査  
アジア経済研究所 地域研究センター  
アフリカ研究グループ グループ長代理

青山 弘之 (あおやま・ひろゆき) 第1章担当  
研究会委員  
アジア経済研究所 地域研究センター 中東研究グループ

山尾 大 (やまお・だい) 第2章担当  
研究会委員  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士(後期)課程

出岡 直也 (いづおか・なおや) 第3章担当  
研究会委員  
慶應義塾大学法学部 准教授

上谷 直克 (うえたに・なおかつ) 第4章担当  
研究会幹事  
アジア経済研究所 地域研究センター ラテンアメリカ研究グループ

遠藤 貢 (えんどう・みつぎ) 第5章担当  
研究会委員  
東京大学大学院総合文化研究科 教授

津田 みわ (つだ・みわ) 第6章担当  
研究会委員  
アジア経済研究所 新領域研究センター  
紛争・国際関係研究グループ グループ長代理



## 序章

# 発展途上諸国における 政党・政党システムの比較研究に向けて

佐藤 章

### 要約：

本章では、本研究会の趣旨を説明し、今年度の議論について簡単な紹介を行う。本研究会は、理論的成果の整理・検討と個別事例の検証を通して、政治変動下における政党に関する重要な論点を導き出し、発展途上国の政党に関する理解に貢献することを旨とするものである。また本研究会は、地域横断的な研究が相対的に少ないことと、近年の政治史の展開のなかで理論的枠組みと現実の乖離がみられる地域もあるとの認識を踏まえ、これらの難点を克服しうるものとして比較研究の手法に注目するものでもある。

### キーワード：

発展途上国 政党 政党システム 地域横断的研究

## はじめに

本研究会は、20世紀の後半以降に発展途上地域で誕生した民主主義国における政党を対象とした、地域横断的な視野に立つての比較研究の試みである。発展途上諸国は、国内の社会経済的構造の変容や国際環境の変化などに対応して、継続的に、比較的激しい政治変動下にあると言えるが、この状況下で、政党がいかに対応し、その結果としていかなる変容を遂げたのかが、本研究会の基本的問題意識となる。

このような現状認識に基づき、本研究会は、理論的成果の整理・検討と個別事例の検証を通して、政治変動下における政党に関する重要な論点を導き

出し、発展途上国の政党に関する理解に貢献することを旨とするものである。

本章では、本研究会の趣旨と初年度の議論の様子について簡単に整理しておく。

## 第1節 研究の背景、意義、狙い

発展途上地域においては、20世紀の後半に、脱植民地化、軍政・権威主義体制からの転換、冷戦終焉に伴う共産党一党支配の崩壊などが進み、その結果として、国民の広範な政治参加と、複数政党による競争を柱とする、代議制民主主義の制度をとる国家が数多く誕生するに至った。これはすなわち、新しい政党ならびに政党システムの誕生をも意味する。政党は、代議制民主主義における基本的要素であり、また、複数の政党の付置関係によって形成される政党システムは、政治体制の質と安定性に大きく関わる。政党システムも視野に入れた政党の研究は、発展途上国の政治のあり方を理解し、将来への展望を行う上で重要な意義を持つ。とりわけ、比較的激しい政治変動を経験している国々については、研究の深化が強く求められている。

とはいえ、発展途上地域の政党に関する地域横断的な比較研究はそれほど活発には進められてこなかった現状がある。発展途上国地域全域を視野に入れた政党に関する研究は、初期の試みである LaPalombara and Weiner ed. [1966]、近年のものとしては Diamond and Gunther ed. [2001] などがあるが、全体として決して多くはない。また、これらの研究は、いずれも民主主義の伝統が長い先進諸国の事例も含めたものである。

総じて、発展途上地域の政党については、国別事例研究、地域に限定した主題別研究、域内の複数国比較研究などの形で研究が積み重ねられてきたといえる。一例として、サハラ以南アフリカ（以下アフリカ）地域に関する研究状況を挙げれば、アフリカ諸国が続々と独立を遂げた1960年代に活発に研究がなされ (Hodgkin [1961] ; Schachter-Morgenthau [1964] ; Coleman and

Rosberg ed. [1964] ; Zolberg [1964, 1966])、近年では民主化後の政党のあり方に関する事例研究の試みも多い(遠藤[1996]; 津田[2005]; 佐藤[2005])。他の発展途上地域に関しても、従来から近年に至るまで政党に対する関心は持続的に見られ、研究は比較的活発である(いくつか例を挙げれば、Mainwaring and Scully ed. [1995] ; Mainwaring [1999] ; 青山 [2005] ; 山尾 [2006] ; Sachsenröder and Frings [1998])。

また、国家あるいは政府と社会とを結ぶ中間項である政党という存在に関しては、トクヴィル、デュルケームらの古典的な研究を源流として、主に政治学と社会学の立場から理論化の試みが連綿と続いてきた。中でも政治学の実分野では、Duverger [1951]、Sartori [1976] を契機にして研究が大きく進展し、政党をめぐる議論が広大な領域にわたることは、たとえば、Katz and Crotty [2006] に見ることができる。

政党と政党システムが、政治研究における核心的なテーマのひとつであったことは、以上の簡単なレビューからも明白である。にもかかわらず、地域横断的な視野に立った研究が少ないのは、各地域固有の条件や研究上の前提条件の違いから、地域を越えた比較研究というものが、相対的に難しい試みであることの反映ではないかと思われる。また、民主化がごく近年のことで研究が着手されたばかりであること(とくにアフリカ)といった、時間差の問題も考えられる。

他方で、比較研究の必要性は高まる一方である。アフリカ諸国などを筆頭に、ごく近年に民主化が起こった国々においては、民主主義の伝統が長い欧米諸国の経験とはかなり異なった様相をみせる民主主義が展開されており、従来の理論的成果を即座に適用できないという問題が生じている。同様のことは、中東地域についても指摘されている。このことは、理論的枠組みと政治の現実の間の乖離が徐々に拡大していることを示唆している。この乖離を解消する一方策として、綿密な個別事例研究を出発点として、いくつかの事例を丹念につきあわせ、より包括性、一般性のある論点を導き出していく作業は有効であると考えられる。

また、理論的枠組みと政治の現実の乖離という問題は、一般理論の構築ないしはそのための分析ツールの洗練を目ざす政治科学アプローチにとっては、カバーしうる事例の限定性という問題として浮上している。他方、地域理解の一環として政治現象に注目し、この個別性の解明を目指す地域研究アプローチにとっては、折角の研究成果が、他地域を扱った研究や理論的研究との共通言語を欠いたまま孤立しがちだという問題として浮上している。この2つの研究アプローチを架橋し、有機的に連携させていくことは政治研究の発展にとって極めて重要であるが、比較研究という手法はそのための格好の手法だと言えよう。

むろん、ここで筆者は、比較研究という手法が自動的にブレイクスルーを約束するものとは考えていない。歴史的背景や社会的条件などの基本的な前提がまったく異なる事例の間に、議論の共通の土台を確立するのは容易ではない。また、既存の理論的枠組みで捉えやすい事例とそうでない事例の間に、理論的枠組みと現実の乖離という関係が写しこまれてしまう場合もありうるだろう。事例間の齟齬や緊張関係をいかにして生産的な議論の契機に変えていくかということは、共同研究を実際に進めていく際にもっとも留意すべき点だといえよう。

## 第2節 本研究会での「発展途上国」概念について

本研究会の標題に用いている「発展途上国」という言葉について、少し述べておきたい。発展途上国という概念には色々問題点がある。とりわけ重要なのは、①まず「発展途上国」「途上国」と呼ばれる国々の多様性（地域、地誌、歴史的経緯、人口構成など。また端的には1人当たり所得の水準が大きく異なる）、②価値的な偏り（社会経済的に発展しているほど望ましいという規範性を反映した表現である。端的には、社会経済指標に基づくランク付けに象徴される）、③今日の世界認識としての限界（先進国内部に貧困層などの

「第3世界」が出現し、いわゆる途上国でも、先進国の都市と見まがうばかりの成長センターとそうでない地域が存在する。またジェンダーや階級的観点に基づき、「第4世界」の存在を指摘する考えもある」という3点である。発展途上国という表現は広く普及した便利な言葉であるが、論争をはらんだ概念であることは間違いない。

他方、次のことは指摘できるだろう。発展途上国と呼ばれる国々の多くは、植民地化に始まり、そこでもたらされた政治・経済両面での近代化とそれに伴う社会構造の変容、脱植民地化と独立、独立後の政治体制の転換（軍政・権威主義→民主主義）、国によっては内戦といった、政治に深く関連する諸事象が、先進諸国よりも比較的短期間の間に、密度が濃く展開されてきたところであるといえる。この「密度の濃さ」は、そもそも、そういった現象が展開されるどころの国家そのものが成り立ってからの時間が相対的に短いこととも関係しているであろう。国境線に仕切られた領土とネーションすら近年の産物である。

このような比較的長い歴史的スパンのなかで考えれば、発展途上国と呼ばれる国々では、やがて先進国となる国々から、交易、植民地化、文化・文物の流入などの接触を通して近代国家のモデルや経済システムがもたらされたことで、政治・経済・文化から、ものの考え方・生活習慣・思想にいたるまで社会の全体的な面での諸変化が惹起されてきた。領土、国民、国家といった基本要素の確立もこの諸変化の一環をなしている。

このように歴史的側面に注目して、これを整理して言い直すと、西洋の衝撃（western impact）に晒されるなかで国家そのものの形成と政治的ダイナミズムを経験してきた国々という意味内容で、発展途上国概念を捉えておくことができるように思われる。そして、これによって、さしあたり先述した問題を迂回することが可能となるだろう。

### 第3節 初年度の議論

初年度の実際の研究会の模様について、簡単にまとめておきたい。研究会を実際に進めるにあたっての狙いは2つあった。第1の狙いは、専門地域を異にする政治研究者同士の議論をとおして、各々がとり組む事例の固有性や特殊性を浮き彫りにしつつ、かつ、相互に共通する側面を探索することをとおして、対象事例に関する深い理解を得ることにある。そして、第2の狙いは、この作業をとおして、発展途上国全体を視野に収めうるような、政党・政党システムに関する包括的な論点もしくは問題提起を行おうとすることにある。

初年度の研究会は、まず、お互いにどのような事例を通して、研究を行っているかを確認する意味で、順次、事例報告を行った。これは上記の第1の狙いに沿った作業である。実施された口頭報告は以下の通りである。

- ・第1回（4月14日）「共同研究会の発足にあたって」（佐藤章主査）
- ・第2回（7月1日）「ケニアにおける「政党」とは何か——政党システムの変容と連続性 1963～2007」（津田みわ委員）
- ・第3回（7月1日）「レバノンの政治構造とヒズブッラー」（青山弘之委員）
- ・第4回（11月10日）「コートディヴォワールの政党史と民族をめぐる論点」（佐藤主査）
- ・第5回（12月1日）「政党の「死」（消滅・解消）をめぐる政治学——南アフリカ・国民党／新国民党の事例」（遠藤貢委員）
- ・第6回（12月1日）「「政党」政治を乗り越える（迂回する）？——ラテンアメリカ「社会運動」の政治的潜在力と限界」（上谷直克委員）
- ・第7回（12月15日）「戦後イラクにおける国家体制と政党政治——民族と宗派をめぐる連携・対立を軸として」（山尾大委員）
- ・第8回（12月15日）「ラテンアメリカにおける「第三の道」階級間妥協と政党システム——「危ない」左派政権と「健全な」左派政権の政党

## システムの特徴による説明？」（出岡直也委員）

これらの事例を通して、かなり多様な論点が俎上に載せられた。まず、最初に議論の焦点となったのは、本研究会において政党を研究するといったとき、具体的にどのような組織が対象となるのかという点である。これは、この研究会における政党の操作的定義をどう定めるかという問題でもある。

各々の国のローカルな文脈において、現に政党として認知され活動している組織は、しばしば、政党機能などに着目して定義される理念的存在としての政党のあり方を逸脱している場合が多い。本研究会で扱う事例としては、例えば、レバノンのヒズブッラーは、議会政党として活動しながら、同時に軍事的活動を行う組織でもある。また、いくつかの組織が連合体や選挙ブロックを形成するという階層的な関係がみられるイラクやケニアの事例からは、いったいどの水準の組織が、理念的な意味での政党に最も適合的なのか、また、適合的でない場合は、その水準の組織は政党と呼べないのか、といった問いが浮上する。さらに、「市民社会」や「社会運動」と呼ばれていた組織が、選挙に参入するようなケースは多々あるが（本研究会では上谷委員がこの問題を扱った）、歴史的に連続しているある組織を、ある時は「市民社会」もしくは「社会運動」で、ある時点から「政党」に変化したというメルクマールを設定することができるのか、また、そういう区別を持ち込むことにはいかなる分析上の意義があるのか、という問題が浮上する。

主査としては、こういった議論を踏まえて、本研究会としては、ある程度確定された政党というものの理念形に照らして、各々の事例がより適合的かそうでないか、という質の判定や類型化の問題には深く踏み込まないという方針をとることとした。これは、ローカルな文脈に寄り添うことに徹し、理念形にてらして「異形」に映ろうとも、対象国において現に政党として認知され活動している組織を具体的に論じることこそが重要だと考えたためである。

このため、本研究会での政党は、実質的に、選挙への参加を目的の一つと

して活動していることのみを条件とする、かなり間口の広いものとして捉えられている。これは現実の多様性を踏まえて、理論と規範に照らした理念形との齟齬の側面も含めて、政党というものを再検討していこうとする、本研究会の趣旨にも適うものであろう。

もちろん、間口を広くとることで、研究の焦点が拡散する危険性は十分ある。また、本研究会としても、「あれもこれも政党です」といった類の羅列的な事例紹介でこと足れりとする考えは毛頭ない。ある程度汎用性のある議論を全体として示せるかどうかは、2年目に課せられた課題となる。

## むすび

以上本章では、本研究会の趣旨と初年度の研究会の模様について簡単に紹介してきた。本報告書は、あくまで中間報告であり、現時点までの各委員の研究メモや作業ノートの意味合いが強いものである。研究会全体としてどのような議論に収斂していくかは、2年度目の課題であり、ここで主査の側から拙速に方向性を示すことはしない。

ただ、ひとつ主査の確信としていえることがあれば、本研究会の標題に掲げた「政治変動下」というキーワードの持つ重みである。本報告書の各稿のスタイルはさまざまだが、先行研究を丹念に渉獵、検討しながら枠組みを模索したり、厳密さに徹して情報を整理した大部の資料を積み重ねたりしなければ、政治の実相を解明できないということが、本報告書そのものを通して雄弁に語られていると感じる。いわば本報告書は、政治の現実が持つダイナミズムのひとつのメタファーとなっていよう。

政治のダイナミズムをいかに捉えるか——このことを、本研究会の成否に関わる課題として再認識し、次年度の議論につなげていくことにしたい。

## 参考文献

### 〈日本語文献〉

- 青山弘之 [2005] 「シリア：民主性誇示か、権威主義維持か——バアス党第10回シリア地域大会に見るアサド政権」(『海外事情』第53巻第11号46-56ページ)。
- 出岡直也 [2006] 「アルゼンティンとチリにおける民主主義の持続——それを可能とした変化は何か」(恒川恵市編『民主主義アイデンティティ——新興デモクラシーの形成』早稲田大学出版部 25-49ページ)。
- 上谷直克 [2004] 「体制変動論における『政治体制』概念の位置とその含意」(『早稲田政治公法研究』第75号 95-128ページ)。
- 遠藤貢 [1996] 「一党体制への転換と複数政党制への回帰——アフリカ」(白鳥令・砂田一郎編『現代政党の理論』東海大学出版会 215-252ページ)。
- 佐藤章 [2005] 「政権交代と少数者のゲーム——コートディヴォワールの「民主化」の帰結」(『アジア経済』第46巻第11-12号 98-125ページ)。
- 津田みわ [2005] 「離党規制とケニアの複数政党制——変質する権威主義下の弾圧装置」(『アジア経済』第46巻第11-12号 39-70ページ)。
- 山尾大 [2006] 「ダアワ党とシーア派宗教界の連携——現代イラクにおけるイスラーム革命運動の源流」(『現代の中東』第41号 2-20ページ)。

### 〈外国語文献〉

- Coleman, James S., and Carl Rosberg ed. [1964] *Political Parties and National Integration in Tropical Africa*, Berkeley: University of California Press.
- Diamond, Larry, and Richard Gunther ed. [2001] *Political Parties and Democracy*, Baltimore, Md.: The Johns Hopkins University Press.
- Duverger, Maurice [1951] *Les partis politiques*, Paris: Almand Colin.
- Hodgkin, Thomas [1961] *African Political Parties*, Harmondsworth: Penguin Books.
- Katz, Richard S., and William Crotty [2006] *Handbook of Party Politics*, London: Sage.
- LaPalombara, Joseph, and Myron Weiner ed. [1966] *Political Parties and Political Development*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Mainwaring, Scott P. [1999] *Rethinking Party Systems in the Third Wave of Democratization: the Case of Brazil*, Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Mainwaring, Scott P., and Timothy R. Scully [1995] *Building Democratic Institutions: Party Systems in Latin America*, Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- O'Donnell, Guillermo [1999] *Counterpoints: Selected Essays on Authoritarianism*

- and Democratization*, Notre Dame, Ind.: University of Notre Dame Press.
- Ottaway, Marina [2003] *Democracy Challenged: The Rise of Semi-Authoritarianism*, Washington D.C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- Sachsenröder, Wolfgang, and Ulrike E. Frings [1998] *Political Party Systems and Democratic Development in East and Southeast Asia (2 volumes)*, Aldershot: Ashgate.
- Sartori, Giovanni [1976] *Parties and Party Systems*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schachter-Morgenthau, Ruth [1964] *Political Parties in French-speaking West Africa*, Oxford: Clarendon Press.
- Zolberg, Aristide R. [1964] *One-Party Government in the Ivory Coast*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- [1966] *Creating Political Order: The Party-States of West Africa*, Chicago: Rand McNally.